

ミネソタ便り9（学校報告編2）

私が通う学校の一日を紹介しよう。

月曜から金曜まで朝の7時になると、この町のラジオ Crookston 放送が定時番組を流す。公立、私立関係なく Elementary School から High School までのその日の学校情報だ。関係者は、この放送で最終確認し一日が始まる。

最初は、天候や道路状況（込み具合ではない。雨、雪、霧、風等の影響）による学校の開講情報である。本日は休校（No school）かどうか。あるなら、通常通りか、1～2時間の遅れか。この情報が最大のニュースである。これは School Bus の運行判断によって決まるようだ。学校責任者と市の交通課の話し合いで毎日決めているという。

学校がある場合、次の情報は Breakfast と Lunch のメニューである。ほとんどの学校が朝食と昼食を給食している。昼はいつでも家族と一緒に食べられる。学校も一緒に食べることを奨励している。

この朝の給食制度は、この町の生活実態から考え出された制度のようだ。予約制だが、よく利用されている。5人に一人の割合、20~30人が毎日学校で食べている。

私は最初、カフェテリアを抜けて教室に行っていた。この方が近道だからである。「おはよう！（日本語で）Everyone！（英語で）」と言って通過して行くのであるが、なぜか、子どもたちの反応が悪い。みな目をそらすように自分たちだけで話し合いながら食べている。朝早く来るので寝起きが悪いのだろうと思っていた。しかし、カフェテリアを抜けて廊下に出ると、そこで待っている子どもたちの反応は実に良い。よく話しかけてくる。

1ヶ月ほどして、やっとなぞが解けた。子ども心が読めた。この朝食姿を見られたくないのだ。夕食と同じようにお母さんがつくった朝食と一緒に食べて学校に来たいのだ。

わたしは、少し遠回りになるが正規のコースで教室に行くように変更した。この朝食制度は、子どもにとって悪い制度だったのである。

最後の情報は学校の主な行事と学校対抗のスポーツである。このときは生徒が盛んに宣伝する。放送局が始終学校に録音しにくる。これらの情報をラジオで聞いているが校内放送を聴いているようだ。このラジオ放送も冬対策のひとつである。でも習慣にするため一年中放送していると言う。

朝食を学校でとる生徒は、学校8時到着に間に合うよう School Bus に乗る。自宅で朝食を済ます生徒は、8時30分到着に合わせ乗る。

School Bus は市営ですべての学校の生徒が相乗りする。この町の School Bus は、日本人もびっくりするほど正確な時刻で運行している。信号がなく、混雑がなく、広い道。待つことはしない。冬は外で待てない環境だ。実に見事な呼吸で家を出てバスに乗る。遅れた人は家族の責任で送り届けるきまりである。

正確に言えば、School Bus が通るところには信号がないというべきであった。実は、この狭い町の中心部に近い車通りの少ない広い四つ角にフルセットの信号設備がひとつだけ整っている。横断歩道と例の目線の高さの Don't Walk と Walk の信号4つと手動信号切り

替えボタンがついている設備である。

私は、以前隠岐諸島に行ったときのことをすぐ思い出した。島に数台しかないタクシーに乗ったとき運転手さんが話してくれた。隠岐諸島の子どもたちが将来本土に行ったとき信号を知らないの？ と言われぬようにひとつだけつくってあると。本当にそうかどうか、実はまだ確かめていない。傷つけないでこの手の質問を英語でするのは私のレベルをいまは超えているからである。まだ時間があるのでもう少しあとでも良いだろう。

School Bus は、車社会のアメリカにおいて一番大切にされている乗り物だと言っても過言ではない。都会でも、田舎でも、どこに行っても例のタイガーズファンが喜びそうな黄色と黒模様の同じ形のバスが走っている。何事においても優先度が高い。サイレンを鳴らしているときの救急車と同じだと思っていただければ間違いない。

当地の運転手さんは市の職員で職業意識が高いし、常に堂々としている。当家の主、ジョンウエイも School Bus とすれちがうときには、人が変わったように模範運転する。私が笑うと、片目をつぶって肩をちょいと持ちあげる。パトカー以上の気の使いようだ。

私が着任した 11 月上旬に、真冬に備えた School Bus 講習会が学校で行われていた。校長をはじめ、先生、生徒はもちろんのこと、すべての学校関係者や父兄を集め、テレビとプロジェクターを使って行われていた。実に立派な講演であったし、聞く生徒たちも真剣な表情であった。本当は、来たてで半分以上何をノタモウテいらっしゃるのかは分からなかったのだが、雰囲気から判断し、市の交通課のお偉さんが来て話しているものだとばかり思っていた。あとで分かったことだが、講師は運転手さんであった。

生徒は、学校に来ると 1 階の廊下で Grade ごとに固まり、全員が 8 時 30 分まで話したり遊んだりして待っている。子どもたちの情報交換のひと時でもある。ここで交換される情報の持つ影響力は大きいらしい。教室には入れない。先生は、遅くても 8 時までには来て準備する。その日よって登校時間が違う。全員自家用車で来る。8 時 30 分まで教室は生徒に邪魔されることのない職員室となる。

当校には職員室はない。トイレ、台所付きのソファや食卓のある先生専用のサロンがひとつある。朝はほとんど使う暇はない。使うのは昼休みが多い。

朝礼や教会礼拝は 9 時までには終り、授業は 9 時に始まる。昼休みはカフェテリアの収容能力の関係で 30 分の時差を持った 2 部制で 1 時間 30 分とる。授業は 2 時 30 分に終り、3 時 30 分までに全員が School Bus か父兄の Pickup Car で帰宅する。

授業の基本は 30 分単位である。すべての Grade の授業を個別に見せてもらったが、低学年ほど小刻みにテーマを変えて集中力が途切れぬよう工夫している。

ひとつのパターンがある。30 分授業だと最初の 10 分先生が説明し、次に 10 分間、何かを自分ひとりでやらせる。そして最後は、ペアを組み、読みあったり、話し合ったりするパターンである。

切り替えるとき、場所を変える。最初は机に座る。次は、廊下に出るか、教室の中では隣が見えないような場所に散らばる。最後は、ほとんどの場合、カーベットのの上に座り込

み、先生も膝を組んで座って話す。見事に切り替えて授業する。

教室のレイアウトは、先生に任せられているようで全部違う。共通しているのは机コーナーとカーペットコーナーがあるくらいであとはバラバラ。6th Gradeの教室などは、このほか4つのロッキングチェアが置いてあり、生徒が座り、椅子を揺らしながら授業を受けている。教室をみると先生の性格や人柄が分かる。

日本語教室が一番殺風景であるが、日本の教室風景に近い。これも日本文化体験のひとつであろう。

1クラス20人が定員である。現在19人が最大、12人が最小のKindergartenから6th Gradeまで7クラス110人である。中学校は少し離れた場所に同じ規模であるが雰囲気さがらりと変わる。

中学生、高校生は、いわゆるTeen-agerでこどもでもない大人でもない特別な年齢層である。そのなかでもSixteenは丁度真ん中で自動車の免許が取れる歳なので、ここでまた大きく変化する。車社会のアメリカでは車が運転できるのと出来ないのでは、いろいろな面で大きな差が生じてくる。極端に現れるのが青少年犯罪の質の面であろう。中学生と高校生では大きな違いが生じている。Drugという言葉が登場する。やはり話を小学校に戻そう。

小学校の先生は、ほとんどがひとりで全部こなす。専門科目は音楽とコンピュータと体育と日本語だけである。美術はみな得意である。なんでもすぐイラストにして掲示してしまう。高学年は、科学、歴史やテーマによって先生方の話し合いで交換授業をやっている。また、時々、中学校から器楽の先生と美術の先生がきて個人指導をおこなう。このやり方が面白い。対象の生徒を集めて別の教室で個人指導するのである。それも授業時間中であるからその生徒だけが抜ける形になってしまう。抜けた分の補講はまず行わない。了解済みということになる。

まず、最初に驚いたのは、授業中に生徒が始終動きまわることである。鉛筆削り、ティッシュ置き場での鼻かみ、水のみ、トイレである。教室外に出るときだけ先生に一声かけてゆく。ダメと言ったケースは見たことがない。先生も大きなマグカップを持って時々飲みながら動き回っている。用事のある父兄やスタッフは授業中でもノックだけして入ってくる。先生は当然のように対応している。

水のみは、冬場で乾燥し湿度が低いときの健康対策かもしれないが。一方で、朝礼と教会礼拝のときは、最上級生が1,2人のKindergartenの面倒を見ながら行う一面もある。

教会の礼拝時以外は、どんな場面でも生徒は手を挙げて発言の許可を求める。雛が親鳥にえさをねだるときの光景に似ているが声は出さない。許可すると大声で発言するが、どんな質問や答えでも決して否定はしない。間違っている場合でも、程度によってGood challenge! Near! Close!などと使い分けて返答する。恥は決してかせない。間違ったときの発想が面白い。

私は、授業を始めるときと、終わるときに日本流のセレモニーをおこなう。

全員で斉唱する挨拶である。先生！おはようございます。はい！みなさん おはようございます。と 先生！ありがとうございました。はい！みなさん ごくろうさん である。これは、みんな面白がってやってくれるし、父兄や先生方にも評判が良い。しかし、真似してくれる先生はひとりもない。これも文化の違いとするか？

以上が学校の日である。ではまた。